

滋賀県の地形区分

小林 健太郎

Delimitation of Geomorphological Region of Shiga Prefecture

Kentaro KOBAYASHI

滋賀県は、日本列島の地体構造の上では全域が西南日本内帯に属し、第三紀鮮新世以降活発化した「六甲変動」と総称される地殻変動が卓越する「近畿三角帯」の東北端に位置している。この地殻変動によって形成された湖盆に帯水したのが琵琶湖で、南北性の卓越する山地が周囲を取り巻いている。琵琶湖と山地の間には、帯状に沖積低地と丘陵地が配列して近江盆地を形成し、一部の地区を除いては分水嶺が県境を画している。このため県内の河川はほとんどすべてが琵琶湖に流入し、琵琶湖の水は唯一の流出河川である瀬田川を通じて大阪湾に排水されている。

琵琶湖は、南北の最大長68km、東西の最大幅22.6km、湖岸線の延長235km、湖面標高84.4m、最大水深103.4mを測り、その面積675km²は滋賀県総面積の約6分の1を占めている。

琵琶湖の周辺には湖北・湖東・湖南・湖西の各沖積平野が分布し、流入河川による沖積作用が活発な東岸では、西岸に比べてその発達が顕著である。湖東・湖南・湖西低地の背後には、鮮新世末期から更新世にかけて堆積した古琵琶湖層群からなる丘陵地がひろがり、湖南地方ではその分布がはるかに南方までのびて三重県と

の境界を越え、上野盆地にまで達している。

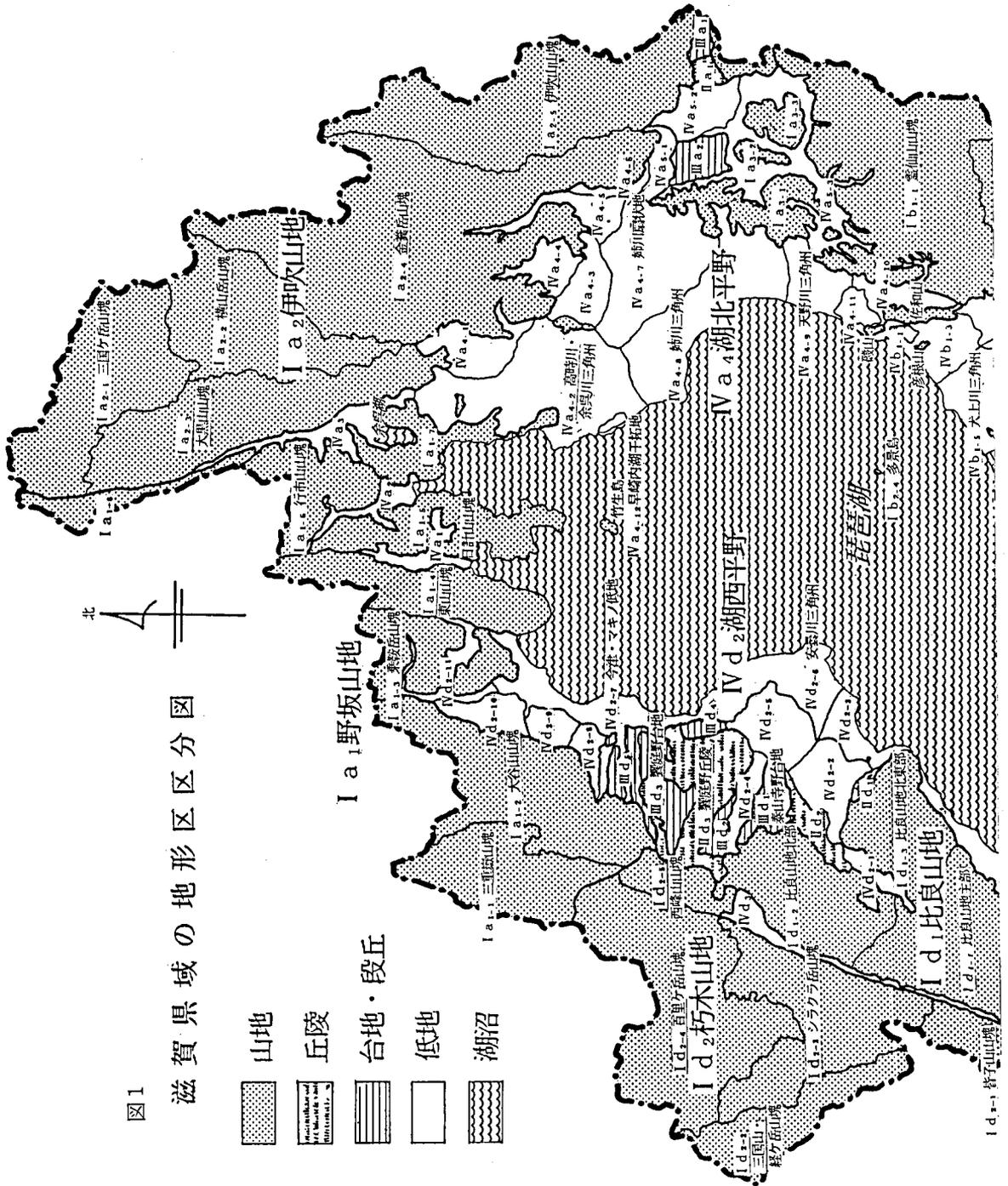
山地は主として秩父古生層および中生代中期以降そこへ貫入した花崗岩からなり、そのほとんどが「近畿三角帯」北東端における「六甲変動」を特色付ける南北方向の断層運動によって形成された地壘山地で、南北性の走行を示している。

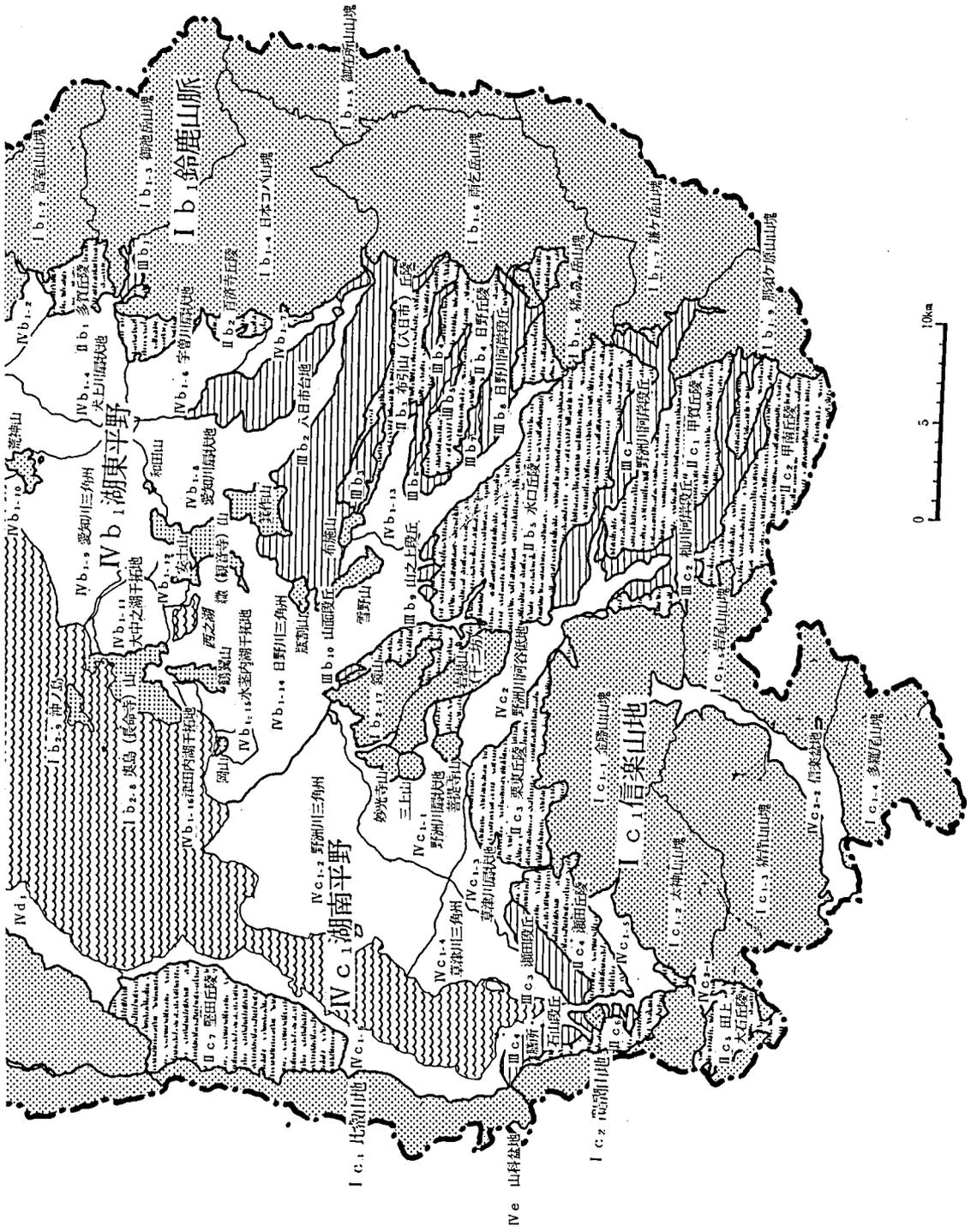
各地形要素の県総面積に占める割合は、山地が47.1% (1,893km²)、丘陵地が9.2% (369km²)、台地・段丘が5.6% (223km²)、低地が20.5% (823km²)、埋立地・干拓地が0.6% (25km²)で、このほかに琵琶湖が16.8% (675km²)、その他の湖沼および河川が0.2% (8km²)となっている。海拔高度別では、100m未満が13.1% (524km²)、100~200mが22.6% (907km²)、200~400mが21.6% (868km²)、400~600mが14.1% (567km²)、600~800mが7.8% (312km²)、800~1000mが3.3% (133km²)、1,000m以上が0.7% (30km²)である。

筆者は、1980年度以来、国土調査法に基づく滋賀県の土地分類基本調査のうち地形分類調査に従事し、1990年度には調査を完了し、1992年3月には最後の調査成果が刊行された。この調査は5万分の1地形図の図幅毎に地形分類図を作製することを主目的としていたが、その成果

図1

滋賀県の地形区分図





を基に、海拔高度や谷密度、地形面の形状と性質や構成物質、地域的なまとまりなどを基準として地形区を区分して図示することも含んでいた。図1「滋賀県域の地形区区分図」と表1「滋賀県域の地形区区分一覧表」は、この地形区区分を滋賀県域全体について集約したものであり、以下これらの地形区毎にその概略を説明するこ

とにしたい。

I 山地

I a 湖北山地

湖北地方の山地は、その大部分が秩父古生層から構成され、「近畿三角帯」の地殻変動が収斂

表1 滋賀県域の地形区区分一覧表

I 山地	I a 湖北山地	I a ₁ 野坂山地 I a ₁₋₁ 三重嶽山塊 I a ₁₋₂ 大谷山山塊 I a ₁₋₃ 乗鞍岳山塊 I a ₁₋₄ 東山山塊 I a ₁₋₅ 日計山山塊 I a ₁₋₆ 行市山山塊 I a ₁₋₇ 賤ヶ岳・山本山山塊 I a ₁₋₈ 柳ヶ瀬山山塊 I a ₂ 伊吹山地 I a ₂₋₁ 三国ヶ岳山塊 I a ₂₋₂ 横山岳山塊 I a ₂₋₃ 大黒山山塊 I a ₂₋₄ 金糞岳山塊 I a ₂₋₅ 伊吹山山塊 I a ₃ 山東山地 I a ₃₋₁ 横山山塊 I a ₃₋₂ 長岡山塊 I a ₃₋₃ 清滝山山塊
	I b 湖東山地	I b ₁ 鈴鹿山脈 I b ₁₋₁ 霊仙山山塊 I b ₁₋₂ 高室山山塊 I b ₁₋₃ 御池岳山塊 I b ₁₋₄ 日本コバ山塊 I b ₁₋₅ 御在所山山塊 I b ₁₋₆ 雨乞岳山塊 I b ₁₋₇ 鎌ヶ岳山塊 I b ₁₋₈ 猪の鼻が岳山塊 I b ₁₋₉ 那須ヶ原山山塊 I b ₂ 湖東島状山地 I b ₂₋₁ 磯山 I b ₂₋₂ 佐和山 I b ₂₋₃ 彦根山 I b ₂₋₄ 多景島 I b ₂₋₅ 荒神山 I b ₂₋₆ 和田山 I b ₂₋₇ 織（観音寺）山

		I b ₂₋₈ 奥島（長命寺）山 I b ₂₋₉ 沖ノ島 I b ₂₋₁₀ 安土山 I b ₂₋₁₁ 鶴翼山 I b ₂₋₁₂ 岡山 I b ₂₋₁₃ 箕作山 I b ₂₋₁₄ 瓶割山 I b ₂₋₁₅ 雪野山 I b ₂₋₁₆ 布施山 I b ₂₋₁₇ 鏡山 I b ₂₋₁₈ 妙光寺山 I b ₂₋₁₉ 三上山 I b ₂₋₂₀ 菩提寺山 I b ₂₋₂₁ 岩根山（十二坊）								
	I c 湖南山地	I c ₁ 信楽山地 <table border="0"> <tr> <td>I c₁₋₁ 金勝山山塊</td> </tr> <tr> <td>I c₁₋₂ 太神山山塊</td> </tr> <tr> <td>I c₁₋₃ 猪背山山塊</td> </tr> <tr> <td>I c₁₋₄ 多羅尾山山塊</td> </tr> <tr> <td>I c₁₋₅ 岩尾山山塊</td> </tr> </table> I c ₂ 醍醐山地 I c ₃ 比叡山地	I c ₁₋₁ 金勝山山塊	I c ₁₋₂ 太神山山塊	I c ₁₋₃ 猪背山山塊	I c ₁₋₄ 多羅尾山山塊	I c ₁₋₅ 岩尾山山塊			
I c ₁₋₁ 金勝山山塊										
I c ₁₋₂ 太神山山塊										
I c ₁₋₃ 猪背山山塊										
I c ₁₋₄ 多羅尾山山塊										
I c ₁₋₅ 岩尾山山塊										
	I d 湖西山地	I d ₁ 比良山地 <table border="0"> <tr> <td>I d₁₋₁ 比良山地主部</td> </tr> <tr> <td>I d₁₋₂ 比良山地北部</td> </tr> <tr> <td>I d₁₋₃ 比良山地北東部</td> </tr> </table> I d ₂ 朽木山地 <table border="0"> <tr> <td>I d₂₋₁ 皆子山山塊</td> </tr> <tr> <td>I d₂₋₂ 三国山・経ヶ岳山塊</td> </tr> <tr> <td>I d₂₋₃ シラクラ岳山塊</td> </tr> <tr> <td>I d₂₋₄ 百里ヶ岳山塊</td> </tr> <tr> <td>I d₂₋₅ 西峰山山塊</td> </tr> </table>	I d ₁₋₁ 比良山地主部	I d ₁₋₂ 比良山地北部	I d ₁₋₃ 比良山地北東部	I d ₂₋₁ 皆子山山塊	I d ₂₋₂ 三国山・経ヶ岳山塊	I d ₂₋₃ シラクラ岳山塊	I d ₂₋₄ 百里ヶ岳山塊	I d ₂₋₅ 西峰山山塊
I d ₁₋₁ 比良山地主部										
I d ₁₋₂ 比良山地北部										
I d ₁₋₃ 比良山地北東部										
I d ₂₋₁ 皆子山山塊										
I d ₂₋₂ 三国山・経ヶ岳山塊										
I d ₂₋₃ シラクラ岳山塊										
I d ₂₋₄ 百里ヶ岳山塊										
I d ₂₋₅ 西峰山山塊										
II 丘陵地	II a 湖北丘陵	II a ₁ 伊吹丘陵								
	II b 湖東丘陵	II b ₁ 多賀丘陵 II b ₂ 百濟寺丘陵 II b ₃ 布引山（八日市） 丘陵 II b ₄ 日野丘陵 II b ₅ 水口丘陵								
	II c 湖南丘陵	II c ₁ 甲賀丘陵 II c ₂ 甲南丘陵 II c ₃ 栗東丘陵 II c ₄ 瀬田丘陵								

		II c ₅ 田上・大石丘陵 II c ₆ 膳所・石山丘陵 II c ₇ 堅田丘陵																				
	II d 湖西丘陵	II d ₁ 高島丘陵 II d ₂ 泰山寺野丘陵 II d ₃ 饗庭野丘陵																				
III 台地・段丘	III a 湖北の台地・段丘	III a ₁ 上平寺台地 III a ₂ 大原台地																				
	III b 湖東の台地・段丘	III b ₁ 犬上川河岸段丘 III b ₂ 八日市台地 III b ₃ 布引山段丘 III b ₄ 佐久良川河岸段丘 III b ₅ 鳥居平段丘 III b ₆ 大塚段丘 III b ₇ 山本段丘 III b ₈ 日野川河岸段丘 III b ₉ 山之上段丘 III b ₁₀ 山面段丘																				
	III c 湖南の台地・段丘	III c ₁ 野洲川河岸段丘 III c ₂ 柚川河岸段丘 III c ₃ 瀬田段丘 III c ₄ 膳所・石山段丘																				
	III d 湖西の台地・段丘	III d ₁ 泰山寺野台地 III d ₂ 奥山段丘 III d ₃ 饗庭野台地 III d ₄ 饗庭段丘 III d ₅ 石田川河岸段丘																				
IV 低地	IV a 湖北低地	IV a ₁ 大浦川河谷低地 IV a ₂ 大川河谷低地 IV a ₃ 余呉川河谷低地 IV a ₄ 湖北平野 <table style="display: inline-table; vertical-align: top; margin-left: 20px;"> <tr><td>IV a₄₋₁</td><td>高時川扇状地</td></tr> <tr><td>IV a₄₋₂</td><td>高時川・余呉川三角州</td></tr> <tr><td>IV a₄₋₃</td><td>虎姫低地</td></tr> <tr><td>IV a₄₋₄</td><td>高畑低地</td></tr> <tr><td>IV a₄₋₅</td><td>草野川河谷低谷</td></tr> <tr><td>IV a₄₋₆</td><td>七尾山山麓扇状地</td></tr> <tr><td>IV a₄₋₇</td><td>姉川扇状地</td></tr> <tr><td>IV a₄₋₈</td><td>姉川三角州</td></tr> <tr><td>IV a₄₋₉</td><td>天野川三角州</td></tr> <tr><td>IV a₄₋₁₀</td><td>鳥居本低地</td></tr> </table>	IV a ₄₋₁	高時川扇状地	IV a ₄₋₂	高時川・余呉川三角州	IV a ₄₋₃	虎姫低地	IV a ₄₋₄	高畑低地	IV a ₄₋₅	草野川河谷低谷	IV a ₄₋₆	七尾山山麓扇状地	IV a ₄₋₇	姉川扇状地	IV a ₄₋₈	姉川三角州	IV a ₄₋₉	天野川三角州	IV a ₄₋₁₀	鳥居本低地
IV a ₄₋₁	高時川扇状地																					
IV a ₄₋₂	高時川・余呉川三角州																					
IV a ₄₋₃	虎姫低地																					
IV a ₄₋₄	高畑低地																					
IV a ₄₋₅	草野川河谷低谷																					
IV a ₄₋₆	七尾山山麓扇状地																					
IV a ₄₋₇	姉川扇状地																					
IV a ₄₋₈	姉川三角州																					
IV a ₄₋₉	天野川三角州																					
IV a ₄₋₁₀	鳥居本低地																					

		IVa ₄₋₁₁ 入江内湖干拓地 IVa ₄₋₁₂ 早崎内湖干拓地 IVa ₅₋₁ 姉川河谷低地 IVa ₅₋₂ 伊吹山山麓扇状地 IVa ₅₋₃ 天野川河谷低地
IVb 湖東低地	IVb ₁ 湖東平野	IVb ₁₋₁ 松原内湖干拓地 IVb ₁₋₂ 芹川扇状地 IVb ₁₋₃ 芹川三角州 IVb ₁₋₄ 犬上川扇状地 IVb ₁₋₅ 犬上川三角州 IVb ₁₋₆ 宇曾川扇状地 IVb ₁₋₇ 角井峠西麓複合扇状地 IVb ₁₋₈ 愛知川扇状地 IVb ₁₋₉ 愛知川三角州 IVb ₁₋₁₀ 曾根沼干拓地 IVb ₁₋₁₁ 大中之湖干拓地 IVb ₁₋₁₂ 小中之湖干拓地 IVb ₁₋₁₃ 佐久良川・日野川扇状地 IVb ₁₋₁₄ 日野川三角州 IVb ₁₋₁₅ 水茎内湖干拓地 IVb ₁₋₁₆ 津田内湖干拓地
IVc 湖南低地	IVc ₁ 湖南平野 IVc ₂ 野洲川河谷低地 IVc ₃ 小盆地	IVc ₁₋₁ 野洲川扇状地 IVc ₁₋₂ 野洲川三角州 IVc ₁₋₃ 草津川扇状地 IVc ₁₋₄ 草津川三角州 IVc ₁₋₅ 田上低地 IVc ₁₋₆ 南湖西岸低地 IVc ₃₋₁ 大石盆地 IVc ₃₋₂ 信楽盆地
IVd 湖西低地	IVd ₁ 比良山地東麓複合扇状地 IVd ₂ 湖西平野	IVd ₂₋₁ 鴨川河谷低地 IVd ₂₋₂ 鴨川扇状地 IVd ₂₋₃ 鴨川三角州 IVd ₂₋₄ 安曇川河谷低地 IVd ₂₋₅ 安曇川扇状地 IVd ₂₋₆ 安曇川三角州 IVd ₂₋₇ 今津・マキノ低地 IVd ₂₋₈ 境川扇状地 IVd ₂₋₉ 百瀬川扇状地

		IVd ₂₋₁₀ 石庭川扇状地 IVd ₂₋₁₁ 知内川河谷低地
	IVe 山科盆地	IVd ₃ 朽木・葛川谷

する北東端に当たるため、激しい構造運動を受けており、県北部で福井県との境界を画す野坂山地と、県域の北東部を限る伊吹山地、および伊吹山地と鈴鹿山脈との間を東西に伸びる関ヶ原低地帯に散在する山東山地とに区分される。

I a₁ 野坂山地

野坂山地は、東は柳ヶ瀬断層によって伊吹山地と、南西は熊川断層によって丹波山地東部の朽木山地と境され、西は福井県の三方断層によって断たれている。山地内の最高峰は三重嶽(974.1m)であるが、この山地の名称になっている野坂岳(914m)は福井県内に位置している。

この山地は、主として粘板岩と砂岩からなる古生層と、これを貫く花崗岩とで構成されており、「近畿三角帯」の北東端に当たるため激しい地殻変動を受けた結果、数本の南北走する断層に切り刻まれて、南北性の傾動地塊や地壘山地が並行している。その南端は賤ヶ岳、葛籠尾崎、海津大崎となって琵琶湖北岸へ半島状に突出し、断層谷は塩津湾、大浦湾、海津湾の湾入となつて、湖北の秀景を生み出している。

野坂山地は南北走する断層谷によって、西から順に三重嶽山塊、大谷山山塊、乗鞍岳山塊、東山山塊、日計山山塊、行市山山塊、賤ヶ岳・山本山山塊、柳ヶ瀬山山塊に区分される。

野坂山地全体としては急斜面山地が卓越しているが、西部の三重嶽山塊や大谷山山塊の稜線上には、標高を異にする幾つかの小起伏地が見られ、箱館山の標高600m前後の小起伏地にはスキー場が開かれている。

I a₂ 伊吹山地

伊吹山地は両白山地の西端に当たり、柳ヶ瀬断層が西縁を画している。高時川、杉野川、草野川、姉川等の河谷が古生層地帯に深いV字谷を刻んでおり、伊吹山地はこれらの谷によって、三国ヶ岳山塊、横山岳山塊、大黒山山塊、金糞岳山塊、伊吹山山塊とに区分される。山地の大

部分は大起伏の壮年期山地の様相を呈しているが、姉川源流の伊吹町甲津原地区は諸岡花崗岩からなり、中起伏の山地になっている。

主峰の伊吹山は標高1,377.4mを測る県下の最高峰で、主に石灰岩からなり、伊吹山西側の斜面では石灰岩の採鉱も行われている。伊吹山の山頂付近とその南の山腹には、比較的大きな台地状の緩傾斜地があり、石灰岩地帯特有のカルスト地形が見られる。凹地には、直径10m、深さ3~4m程度のドリーネが2、3見られ、尾根などの凸所には石塔原(カレンフェルト)が発達している。しかし、周囲の山地に比べて一段と高く抜き出ているこの山地では、山地斜面も急傾斜地がほとんどを占め、石灰岩地域といっても、地表流の侵食作用が強力で、急傾斜の山腹を刻む谷は幼年期の状態で、その断面をV字型とする大きなものが多い。

I a₃ 山東山地

長浜市の東に、標高300mほどで南北に連なる横山山塊と、さらにその東の天野川沿いの低地の中に散在する標高280mほどの長岡山塊、および標高439.6mの清滝山山塊からなる。

この山地は、かつての壮年期山地が沈降して上部だけが地上に残されているもので、現在は、山麓を姉川や天野川によってつくられた低地に取り囲まれている。沈降山地としての特色は琵琶湖に近いほどよく現れており、西部では標高が低い割りに大きな谷が発達し、幅広い谷の中を先端まで低平な谷底平野が入り込んでいる。低地との境の山麓線は明瞭な傾斜変換線をなし、周囲の低地の中に、かつては尾根続きであった先端部が離れ島状に孤立している。

長岡山塊と清滝山山塊は、主に堅硬なチャートから構成されているので、砂岩、粘板岩を主とする横山山塊とは、開析の状態が異なる。山腹の谷の河床勾配は急で、谷底平野はほとんど発達せず、山麓に急傾斜の小さな扇状地をつくっ

ている所が多い。

I b 湖東山地

湖東地方の山地は、滋賀県域の東辺を画して岐阜・三重両県との境界を南北走る鈴鹿山脈と、湖東平野の中に点々と島状に散在する数多くの小山地からなる湖東島状山地とに分けられる。

I b₁ 鈴鹿山脈

近江盆地の東辺を限って南北走る鈴鹿山脈は、北は関ヶ原低地帯を隔てて伊吹山地に相対し、南は加太^{かふと}地溝を挟んで三重県下の布引山地に続き、南西端は甲南丘陵を挟んで信楽山地と向きあっている。東辺は急峻な断層崖を伊勢平野に向け、西辺は湖東平野および湖東丘陵に接している。

鈴鹿山脈の大部分は秩父古生層の粘板岩・砂岩・石灰岩・チャートから構成されているが、南半部の稜線付近には中生代末に貫入してきたとされる花崗岩地域がひろがり、中央部西縁の角井峠付近には湖東流紋岩が分布している。

全体として、西方に傾斜しながら隆起したストラスト性の地塁山地であるため、東側には急傾斜しているのに対し、西側の近江盆地に向かっては少しずつ高度を下げており、分水界の位置も東へ偏っている。稜線には北より霊仙山(1,084m)、御池岳(1,242m)、藤原岳(1,143m)、御在所岳(1,210m)などの山頂が連なり、標高1,000m前後には準平原遺物と思われる小起伏地が認められるが、全体として滋賀県側では中起伏山地が卓越している。

分水界から西流する芹川・犬上川・愛知川・日野川・野洲川などの河川は、いずれも上流部で深い峡谷を刻んで流下しており、これらの河谷によって鈴鹿山脈は、霊仙山山塊・高室山山塊・御池岳山塊・日本コバ山塊・御在所山山塊・雨乞山山塊・鎌ヶ岳山塊・猪の鼻が岳山塊・那須ヶ原山山塊の9地区に区分される。

北部の古生層中には石灰岩地域がみられ、霊仙山や御池岳付近では山頂の小起伏地にドリーネやカレンフェルトなどのカルスト地形を発達させ、山麓にも「河内の風穴」などの石灰洞がある。一方、南端の野洲川源流地域は第三紀中新統に属する鮎川層群からなり、小起伏山地に

なっている。

I b₂ 湖東島状山地

湖東平野に散在する島状の小山地を総称して湖東島状山地と呼ぶ。北から、磯山(159.7m)、佐和山(232.9m)、彦根山(125m)、荒神山(280m)、和田山(180.1m)、織(観音寺)山(440m)、安土山(190m)、奥島(長命寺)山(424.7m)、鶴翼山(283.8m)、岡山(187.7m)、箕作山(370m)、瓶割山(234.4m)、雪野山(竜王山、308.8m)、布施山(玉緒山、240.9m)、鏡山(384.8m)、妙光寺山(265m)、三上山(432m)、菩提寺山(353.3m)、岩根山(十二坊、405.6m)があり、琵琶湖に浮かぶ多景島や沖ノ島(220.2m)も含まれる。

これらの島状山地は古生層や湖東流紋岩、花崗岩などで構成されており、かつてこの地域で侵食作用が活発であった時代に、その侵食から取り残された残丘である。いずれも30度前後の急斜面が山麓から山頂や稜線まで続いており、山頂部にも緩斜面はほとんどみられない。山腹斜面を刻む谷は多いが、いずれも小規模短小なものばかりで、深く刻み込まれた谷筋は存在しない。

I c 湖南山地

湖南地方の山地は、花崗岩を主体として全域が小起伏山地に含まれる信楽山地と、大部分が秩父古生層からなる醍醐・比叡の両山地とに大別される。

I c₁ 信楽山地

信楽山地は滋賀・京都・三重の3府県にまたがり、北東辺を野洲川河谷、北西辺を湖南平野と宇治丘陵、西辺を京都盆地南部、南辺を笠置山地との間を刻む木津川河谷と上野盆地北縁の島ヶ原断層崖で囲まれた地塊状山地の総称で、構造線に沿って刻み込まれた河谷によって、いくつもの山塊に分けられる。滋賀県域に属するのは、金勝山山塊、太神山山塊、猪背山山塊、多羅尾山山塊である。

この山地は秩父古生層、領家変成岩、および花崗岩類などから構成され、鮮新更新世の「六甲変動」に伴う地殻運動によって隆起していく過程で、構造線に沿う変位が地塊化を進めた結果、地塊ごとに示差的な高度分散が生じて現在

の地形が形成されたものと解釈されている。

この山地には、標高400m前後と600m前後との2面の小起伏地が発達している。その間を大戸川、信楽川の本支流が複雑な河系模様をつくって侵食しており、北部と東部では草津川、野洲川の支流も侵入して浅い谷を刻んでいる。

信楽山地を構成する花崗岩は風化が進んでマサ化しており、土砂の流出が激しいため、ここから流出する河川は、下流で天井川を形成している。この山地では、古代～近世に野洲川や瀬田川による木材搬出の便を利用して森林が乱伐されたため、その後は植生の回復が妨げられ、明治以降近代的な植林事業が行われているにもかかわらず、なお北半部の太神山（田上山）付近や阿星山付近には悪地地形が目立っている。

I c₂ 醍醐山地

醍醐山地は近江盆地西辺の最南端を限る山地で、北は逢坂峠で比叡山地に接し、東は瀬田川および田上・大石丘陵を隔てて信楽山地に相対している。西は山科盆地に臨み、南辺は宇治丘陵に限られている。南北の延長約15km、東西の最大幅約9kmを測るが、滋賀県域に含まれるのは山地の東辺のみで、京都府との境界線上に、北から南へ向かって音羽山（593.4m）、千頭山（602.0m）、岩間山（443m）が続き、岩間山から東南方に伸びる稜線は、桜峠を経て袴腰山（391m）、立木山（305.6m）に至り、鹿跳びの峡谷を挟んで妙見山（200m）に達している。

山地の斜面は大部分が傾斜30度以上の急斜面で、音羽山周辺や南部の宇治川ライン谷壁などには傾斜40度以上の斜面も見られる一方、桜峠の付近や山麓部などには傾斜20～30度の中間斜面も分布している。山頂の小起伏地は行者ヶ森（440m）など京都府域には若干見られるが、滋賀県側にはほとんど分布していない。

山地を構成している岩石は大部分が古生層の砂岩・粘板岩・石灰岩・チャートなどで、起伏量が大きく谷密度の低い急斜面が卓越している。一方、袴腰山の北麓から桜峠を経て岩間山の東麓にかけての一带は田上山地から続く花崗岩で構成され、起伏量の小さい中間斜面になっている。

石山寺の境内を含む瀬田川西岸の伽藍山（239m）は、醍醐山地の分離丘陵で、丸みを帯びた

穏やかな起伏を呈している。その南東部の一角には珪灰石の溶食地形が見られ、天然記念物に指定されている。

醍醐山地の南部には瀬田川（宇治川）によって刻み込まれた峡谷が見られる。その1はこの山地の南東端、立木山と妙見山との間約1kmの鹿跳び峡谷で、その河床には無数のポットホールが花崗岩を穿って発達している。その2は大津市外畑町から下流、京都府宇治市まで続く宇治川ラインの峡谷で、急峻な谷壁に挟まれた先行谷が屈曲して続いているが、河床は天ヶ瀬ダムで堰止められた人工湖の水面下に没している。

I c₃ 比叡山地

比叡山地は近江盆地の南西部を限り、滋賀県と京都府との境界を画している。北は途中峠から南は逢坂峠まで、延長約20kmにわたって南北に連なるスラスト性の地壘山地で、西辺は花折断層によって明瞭に限られているが、東辺を限る皇子山断層は現在の地表面には顕在化しておらず、堅田丘陵の西端とその南に続く複合扇状地の地下に潜在している。稜線には北から順に大尾山（681.4m）、水井山（794.1m）、横高山（767m）、比叡山（大比叡、848.3m）、如意ヶ岳（470m）、逢坂山（325.0m）などの山頂が並んでいる。

山地を構成する斜面は大部分が傾斜30度以上の急斜面で、大比叡の周辺をはじめ、山地を刻む河谷の谷壁には40度以上を測る斜面も少なくない。これに対し、傾斜30度未満の中間斜面は、滋賀県側では大津市穴太から三井寺に至る南部の山麓に連続して見られるのみで、北部では点在しているにすぎない。

一方、大比叡の北方と水井山・横高山の東方には、前者で標高650～730m、後者で標高600～650mの小起伏地が見られ、前者には根本中堂や阿弥陀堂、浄土院や釈迦堂をはじめとする延暦寺の中核施設が集中する一方、後者にも横川中堂や元山大師といった延暦寺の重要施設が立地している。

比叡山地を構成している岩石は、粘板岩や砂岩、チャートからなる古生層と、この古生層の背斜構造部へ白亜紀に貫入してきた花崗岩であり、両者の接触地帯では花崗岩の貫入時に熱変成を受けて硬化したホルンヘルスが見られる。

このような構成物質の違いが地形にも反映されているのが、比叡山から如意ヶ岳へかけての一带で、比叡山頂の大比叡および如意ヶ岳のピークは、硬化したホルンヘルスの部分が、その後の差別侵食の結果、局部的に残丘状の高まりとして残されたものである。これら両ピークの北側と南側に続く古生層の山地は起伏量が大きく、相対的に谷密度が低いのに対し、花崗岩で構成されている両ピークの間では、花崗岩の風化が激しいため侵食の進行が早く、稜線の標高が400m前後まで低下する一方、小規模な谷が極めて高密度、複雑に刻まれた結果、起伏量の小さい地区を作り出した。この花崗岩の侵食によって搬出された砂が、京都側では白川砂と呼ばれる造園用の白砂となり、滋賀県側では白砂青松の湖岸を生み出すことになった。

また、この地区では南北方向の分水嶺が近江盆地側に著しく偏っているのが注目される。これは花崗岩地区の東側に南北方向の石英斑岩の岩脈が存在し、これが硬岩帯となって壺笠山、宇佐山、千石岩などの副尾根を形成しているからで、このため山地の開析や水系の発達も西側で一層進行したのに対し、東側では短小な谷しか形成されなかった。

この地区の低い稜線は、比叡山地の中央部を横切る交通路を提供し、志賀越、山中越の通路が古くから利用されてきた。昭和33年には山中越の田ノ谷峠から比叡山ドライブウエーが建設されて観光開発が進められ、その後田ノ谷峠の南方には比叡平の大規模な宅地造成が行われ、山上の住宅地として特異な存在になっている。

I d 湖西山地

湖西地方の山地は、花折断層を境に、東南方の比良山地と、北西方の朽木山地とに分けられる。

I d₁ 比良山地

近江盆地の西辺を限る比良山地は、北は安曇川峡谷を隔てて朽木山地北東端に接し、南は途中峠の鞍部を経て比叡山地に続いている。西辺は花折断層に沿って北流する安曇川の谷を挟んで朽木山地に相対し、東辺は琵琶湖西岸に急崖を聳え立たせている。その延長は北端の安曇川峡谷南岸から南端の和辻川北岸まで24km、東西

の最大幅は白ひげ浜と安曇川河谷との間で約12kmを測る。

山地の平面形は、全体としては北に広く南に狭いくサビ型を呈しているが、北部では鴨川の上流部が縦谷を刻んでいるため、主稜線は北部で二分されてY字形をなしている。この主稜線の分岐点付近以南が比良山地主部で、標高1,000m前後の稜線が続くのに対し、釣瓶岳北方の鞍部を境に主稜線の標高は700~800mへと低下し、中間斜面山地が相対的に多くなる。この地区を比良山地北部と呼ぶ。他方、釈迦岳北東方の鞍部から白ひげ浜に至る間では、主稜線の標高が700m前後から400~500mへと低下し、比良山地北東部を構成している。

比良山地主部は、釣瓶岳(1,098m)、武奈ヶ岳(1,214.4m)および釈迦岳(1,060.6m)から南方へ、堂満岳(1,057m)、烏谷山(1,076.7m)、比良岳(1,051m)、打見山(1,102m)、蓬萊山(1,174.3m)、権現山(996m)、霊仙山(750.8m)と続く主稜線を軸としている。

この山地は東西両側を断層に起因する直線的な急崖に挟まれた典型的な地壘山地で、標高1,000m前後には準平原遺物と思われる小起伏地が見られ、八雲ヶ原の高層湿原も存在している。この小起伏地の標高は、隣接する朽木山地のそれより200mほど高く、花折断層を境として比良山地の部分が不等隆起した結果を示すものと考えられている。

比良山地の東半部は黒雲母花崗岩からなり、この地区では谷の開析が進んでおり、琵琶湖に面する急斜面の稜線付近を中心として崩壊地が数多く分布しているのに対し、西側の古生層地域では、明王谷を除いて、ほとんど開析が進んでおらず、崩壊地も見られないというように、地質構成の違いを反映した東西斜面の差が顕著である。

I d₂ 朽木山地

朽木山地は、西方に広がる丹波山地の東端に当たり、秩父古生層で構成されている。花折断層に沿う安曇川河谷によって比良山地と、熊川断層に沿う北川および石田川上流の谷によって野坂山地と隔てられている。山地中には安曇川およびその支流の針畑川、北川、麻生川などの本支流や、北川上流の寒風川などがV字谷を刻

み、これらの谷によってこの山地は、皆子山山塊、三国山・経ヶ岳山塊、シラクラ岳山塊、百里ヶ岳山塊、西峰山山塊に区分される。

この山地では、山頂域の小起伏地は認められないが、三国岳(775.9m)、百里ヶ岳(931.3m)、駒ヶ岳(780.1m)などの山頂や、これに続く主稜線は標高800~900mの定高性を示している。山腹の斜面は40度以上を測る急斜面が多く、ほとんど全域が急斜面山地に分類される。

山地を刻む針畑川や北川、麻生川、さらには寒風川の本流沿いには、やや幅のある谷底平野が細長く形成されており、河床勾配の穏やかな老年期状の時階を示している。ところが、谷底平野の downstream 側には河岸段丘が発達し、さらにこれらの河川が朽木山地の縁辺部で安曇川や北川に注ぐ直前には、先行谷状の穿入蛇行を行い、谷床を欠いた壮年期の時階を示していることが注目される。これは、下流から上流へかけての減傾斜運動、すなわち丹波山地の東高西低の傾斜運動に対応するものと考えられている。

II 丘陵地

II a 湖北丘陵

湖北地方では、伊吹山地と鈴鹿山脈との間に東西に伸びる関ヶ原低地帯の中央部、伊吹山の南麓に、小流に開析されてなだらかな起伏をもつ伊吹丘陵(II a₁)が見られるのみである。この丘陵は、最高点の標高320m、面積約2km²の小さなもので、西麓に伊吹町大清水の集落が立地し、南西流して琵琶湖に注ぐ天野川上流域と、南東流して牧田川・揖斐川に合して伊勢湾に注ぐ藤古川流域との分水界を画している。

II b 湖東丘陵

鈴鹿山脈の西麓に広がる標高100~300mの丘陵地を総称して湖東丘陵という。この丘陵地は鮮新世末期から更新世にかけて古琵琶湖の湖底に堆積した粘土や砂、砂礫層が地殻変動を受けて変位し、古琵琶湖の水位が低下したことによって干陸化した結果形成されたもので、その構成層は古琵琶湖層群と呼ばれている。

湖東丘陵の主要部は愛知川以南に分布し、野洲川までの間に広大な丘陵地を展開している。最大のものは土山町西部から竜王町の南西部ま

で、東西24kmにわたって伸びる水口丘陵(II b₅)で、南北も最大幅約8kmに及ぶ。古琵琶湖層群のうち、砂と粘土の互層を主体とする蒲生累層から構成されており、標高200~320m付近に高度のよくそろった尾根が発達する一方、南北両側から極めて狭長な開析谷が奥深く侵入して、樹枝状の支谷を複雑に展開しており、これらの谷の先端に至るまで谷底平野が入り込んで、主として水田に利用されている。

水口丘陵の南端には東西に伸びる布引山があり、その尾根筋には高位段丘の平坦面が残されている。段丘面の標高は240~275mで、野洲川の現河床からの比高は40~70mにも達し、前述した尾根筋より10~70mも高くなっている。このように段丘面のほうが丘陵より高くなっている原因について、植村善博は、丘陵を構成する蒲生累層の砂や粘土層と、段丘礫層との間に見られる侵食抵抗度の差にもとづいて、段丘礫層堆積後の侵食過程において地形の逆転が生じたものと考えている。この段丘面は北西方向へ7%程度傾斜しており、現在の野洲川の流路の方向とは一致しない。

水口丘陵の北には、日野川、佐久良川の谷を隔てて日野丘陵(II b₄)、布引山(八日市)丘陵(II b₃)が配列している。日野丘陵は東南辺を鈴鹿山脈雨乞岳山塊の急斜面に接して、東西の最大延長11km、南北の最大幅約6kmの、三角形に近い平面形を有しているが、その間には佐久良川の支流南川や日野川本流の谷が深く入り込んでいるため、これらの谷によって東西に伸びる3つの部分に分けられる。一方、布引山(八日市)丘陵は、永源寺町甲津畑付近から西方へ伸びる東西14km余、南北2km前後の東西に細長い丘陵で、丘陵地の標高はほとんどが200~300mであるが、東端で鈴鹿山脈に接するところでは350~400mにも達する一方、西端は130m前後で八日市台地に移行している。

これらの丘陵地は、長い間松林に覆われていたが、起伏量が小さく、地質的に土工が容易であるうえ、近年は道路網も整備されてきたことから、工業団地や住宅団地、ゴルフ場の開発が盛んに行なわれており、人工改変地が増加してきている。

愛知川以北では丘陵地の分布が限られており、

鈴鹿山脈の西麓に小規模な丘陵が断続的に付着しているにすぎない。それらは、宇曾川を境として、多賀丘陵（Ⅱ b₁）と百済寺丘陵（Ⅱ b₂）とに分けられている。多賀丘陵は、北は多賀町多賀から南は秦荘町松尾寺付近まで続き、犬上川によって北部と南部に分断されている。丘陵地の標高は140～200m前後であるが、北部東端の桜峠付近では250～300mに達している。百済寺丘陵は日本コバ山塊の西麓に付着している小規模な丘陵で、崖錐性斜面や押し出し扇状地に覆われているところも少なくない。この丘陵は段丘化した2段の隆起扇状地という性格が強く、深さ10～30mの谷が刻み込まれている。

Ⅱ c 湖南丘陵

信楽山地と鈴鹿山脈との間、野洲川以南の地域に広がる丘陵地は、標高200～300mの小起伏を示し、柚川を境に、北部の甲賀丘陵（Ⅱ c₁）と南部の甲南丘陵（Ⅱ c₂）とに分かれ、後者は県境を越えて上野盆地北東部に続いている。これらの丘陵は古琵琶湖層群中の佐山累層で構成され、粘土層が圧倒的に多い。

信楽山地の北縁に付着する栗東丘陵（Ⅱ c₃）は、信楽山地に接する部分では尾根筋の標高が250m前後まで高くなっているが、北へ向かうにつれて高度を下げ、野洲川に臨む北東辺では150～160mまで低下している。主として蒲生累層で構成されているが、丘陵内に古生層の低山性小山地を包み込んでいる。

信楽山地の北西方に、田上低地を隔てて北東から南西に伸びる丘陵地が瀬田丘陵（Ⅱ c₄）で、最高点は滋賀医大の南方にある標高186mの独立標高点であるが、その東北東1.3kmには金勝山山塊の分離丘陵である牟礼山（223.1m）が突出している。丘陵南端は田上低地に向かって比高50m前後の急崖をなしているのに対し、北側は湖岸へ向かって緩傾斜する傾動地塊状を呈している。構成層は蒲生累層から堅田累層に対比されている。

信楽山地の西辺と醍醐山地の南東辺とに挟まれ、近江盆地と京都盆地を結ぶ低地帯に形成されたのが田上・大石丘陵で、標高は100～200m。南西部には標高250m前後の小山地を介させる一方、信楽川・大石川の下流部は河岸段丘が発達した大石盆地になっている。この丘陵を構成

する古琵琶湖層群は、京都府宇治田原町を経て宇治丘陵を構成する大阪層群に連なっており、古瀬田川の堆積層だと考えられている。

瀬田川の西岸、醍醐山地の東麓に付着しているのが膳所・石山丘陵（Ⅱ c₆）であり、標高150～250mで大津市街の背後に連なっているが、山地から流下する小河川に刻まれて分断されている。

琵琶湖の西岸では、比叡山地北部の東麓に堅田丘陵（Ⅱ c₇）が紡錘形状に広がり、丘陵面は全体として東に緩斜するとともに、北に高く南ほど低くなっている。堅田丘陵東端の崖は逆断層をともなう撓曲によって生じたもので、比高20～40mを計り、丘陵を刻んで東流する和辻川、真野川の河谷には数段の河岸段丘が形成されている。

これら湖南地方の丘陵地では近年各種の開発による地形の人工改変が進んでいる。

Ⅱ d 湖西丘陵

湖西地方には、安曇川を挟んで泰山寺野丘陵（Ⅱ d₂）と饗庭野丘陵（Ⅱ d₃）とがあり、比良山地の北東端に高島丘陵（Ⅱ d₁）が付着している。

高島丘陵は岳山（565m）の北東麓に位置する丘陵地で、北西から南東に伸びる長軸が約2km、これに直交する最大幅が1km強に過ぎない小規模なものである。傾斜20度未満の緩やかな起伏を呈している。

比良山地北部の北東麓に付着している泰山寺野丘陵は、層厚数10mにも達する厚い古琵琶湖層群の砂礫層によって構成され、北部には泰山寺野台地の段丘面が広がっている。南部は八田川の本支流や鴨川の支流に刻まれ、その谷壁は20～30度の傾斜を有しているが、尾根筋には泰山寺野台地に対比される高位段丘面が、小規模ながらも比較的良好な状態で残されている。

湖西地方最大の丘陵である饗庭野丘陵は、朽木山地東端の西峰山山塊北東部の堂建山から東へ扇型に広がり、南辺を安曇川、北辺を石田川の谷に切られている。この扇型の一辺の長さは約7kmにも達し、北部から西部にかけては広々とした饗庭野台地の段丘面が広がっている。これに対し、南部から東部にかけては河川による侵食が著しいため、段丘面は侵食から取り残された稜線部にのみみかろうじて分布しているに過

ぎず、急斜面が卓越し起伏量の大きい丘陵地になっている。

Ⅲ 台地・段丘

Ⅲ a 湖北地方の台地・段丘

湖北地方の台地は関ヶ原低地帯に分布する上平寺台地(Ⅲ a₁)と大原台地(Ⅲ a₂)のみである。伊吹山の南に位置する上平寺台地は、藤古川沿いの下位段丘としてはもっとも上流にあり、中央を藤古川の幅100~150mの谷底平野で切られているものの、台地面はほとんど開析されていない。

大原台地は山東町の北部に位置し、北の姉川沿いの低地との間には約4kmにわたって、比高約3~10mの段丘崖が見られる。台地面は南西に向かって緩やかに傾斜しており、南の天野川河谷低地との境界は不明瞭である。

Ⅲ b 湖東地方の台地・段丘

湖東地方は、近江盆地の中でもっとも台地・段丘の発達が顕著である。それらのうち最大の面積を有するのが八日市台地(Ⅲ b₂)で、愛知川の谷口から西方へ扇型に広がり、東西の最大延長約16km、南北の最大幅約10kmを測るが、中央部に段丘崖を刻んで西流している愛知川によって南北に二分されている。この台地は、愛知川によって形成された古期扇状地が、鈴鹿山脈の隆起に伴う基盤の傾動運動によって段丘化したもので、下位段丘に相当する段丘面はよく保存されており、段丘崖は谷口から離れるにしたがって、愛知川河谷の扇状地面との比高を減じている。

八日市台地の北では、犬上川の北谷と南谷との合流点付近にのみ河岸段丘がまとまって分布しており、これを犬上川河岸段丘(Ⅲ b₁)とした。これは多賀町一ノ瀬から大蛇ノ淵までの犬上川両岸に発達する河岸段丘群と、これに隣接する多賀町の小原の河岸段丘とを一括して設定した地形区で、標高150~200mの下位段丘を主体とするが、中位段丘と上位段丘も見られる。

一方、八日市台地の南に続く湖東丘陵地域には数多くの段丘が見られる。これらのうち、布引山段丘(Ⅲ b₃)は布引山(八日市)丘陵の西部に位置する布引山の東方から近江鉄道本線の

付近まで、約22%の勾配で西北西へ傾斜する上位段丘である。段丘面の上限高度は240~250mの付近にあり、205~220m、160~180m、130~150mなどの高度に階段状の平坦面がある。

布引山(八日市)丘陵と日野丘陵との間を西流する佐久良川の谷には、きわめて連続性の良い佐久良川河岸段丘(Ⅲ b₄)が発達している。その大部分は下位段丘で、日野町中在寺より下流では南岸に比高2~3mの明瞭な段丘崖が見られるが、上流部では広い谷底面として連続的に分布し、河川の流路のみが谷中谷を刻んでいるに過ぎない。

日野丘陵の西部は中位段丘に分類される段丘面に取り巻かれており、それらのうち北縁のものを鳥居平段丘(Ⅲ b₅)、西端のものを大塚段丘(Ⅲ b₆)、南西辺のものを山本段丘(Ⅲ b₇)に区分した。鳥居平段丘は日野町の鳥居平新田から安部居まで、延長約1.5km、最大幅0.7kmにわたって広い段丘面を連続させており、西端の安部居集落南部で標高180m、南東端の鳥居平新田付近で220mを示し、北西に向かって勾配26.7%で傾斜している。大塚段丘のうち、日野丘陵の北辺に接する東部の段丘面は丘陵から流出する小河谷に刻まれてやや起伏の多い断片的なものになっているが、西部の蒲生町大塚付近には12%前後の勾配で西北西に緩斜する広い段丘面が残されている。山本段丘は日野川河岸段丘の下位段丘との間を比高10m前後の段丘崖で縁取られ、段丘面は浅い谷に刻まれて若干の凹凸を示しているが、全体としては勾配17%で西方へ傾斜している。

日野川河岸段丘(Ⅲ b₈)は日野川の右岸、日野丘陵の南辺に沿って発達し、段丘面の幅は最大1.5km、総延長は9km余りにも達している。段丘面の勾配は、東部では25%とやや大きいが、中部以西では13%程度となり、西端は日野町内池で勾配6%前後の扇状地面に移行している。段丘面の南辺を限る段丘崖は、日野町音羽付近から西大路まで、比高5m前後で日野川本流の右岸沿いに続いている。

水口丘陵の北端には小規模な山之上段丘(Ⅲ b₉)と山面段丘(Ⅲ b₁₀)がある。山之上段丘は水口丘陵北部の開析谷によって3つに切断され、段丘面もまた浅い谷に刻まれてやや起伏が

多い。段丘面の上限高度は160m付近で、ここから北に向かって32%という強い勾配で傾斜している。山面段丘は鏡山の北東麓に付着する丘陵地の先端に形成されたものであるが、現在では段丘面の人工改変が著しく、ほとんど原地形をとどめていない。

Ⅲc 湖南地方の台地・段丘

湖南地方の段丘は、野洲川流域の野洲川河岸段丘(Ⅲc₁)と杣川河岸段丘(Ⅲc₂)、および瀬田川左岸の瀬田段丘(Ⅲc₃)と右岸の膳所・石山段丘(Ⅲc₄)とに区分される。

野洲川河岸段丘は野洲川の中流から上流にかけての河谷に発達する河岸段丘の総称で、連続性の良い下位段丘を主体とするが、中流部の南岸や上流部には中位段丘も見られる。下位段丘の標高は、野洲川と田村川との合流点で235m、土山町西部で200m前後、水口町の中心市街地で180m、西端の水口町泉付近では約153mである。

甲賀丘陵と甲南丘陵との間を北西流する杣川の広い谷に形成されているのが杣川河岸段丘で、甲南町寺庄付近から上流では谷底平野がほとんど見られず、下位段丘面が河谷の大部分を占めており、杣川の流路のみが段丘面を刻んで谷中谷の状態になっている。段丘面の標高は、上流部の250m前後から下流部では約170mとなっているが、段丘面の連続性はきわめて良い。中位段丘は中流部の南岸と上流部に見られる。

瀬田段丘は、瀬田丘陵の北斜面に続いて、東は草津市追分から西は瀬田川左岸まで、標高95~130mの段丘面が北西へ向かって緩やかに傾斜しており、先端部は沖積低地との間に明瞭な段丘崖をもっていない。段丘面は瀬田丘陵から流下する小河川によって開析され、小規模な谷底平野によって隔てられている。

瀬田川の右岸、膳所・石山丘陵の前面に分布するのが膳所・石山段丘で、段丘面の標高は約100~150mである。開析台地の状態を呈する上位段丘と、標高100m以下に連続して発達している下位段丘とに分けられる。石山以南の瀬田川右岸では段丘面の保存が良好で、三田川右岸や石山寺・滋賀大学・赤尾町などで上位段丘が台地状の景観を示している一方、下位段丘は瀬田川右岸沿いに連続している。

Ⅲd 湖西地方の台地・段丘

湖西地方の台地・段丘を代表するのは泰山寺野台地(Ⅲd₁)と饗庭野台地(Ⅲd₃)である。泰山寺野台地は泰山寺野丘陵の北半部を占める台地で、台地面は標高190~215mで緩やかに波打っており、表層には黒ボク土壌が分布し、第二次世界大戦後の開拓により、滋賀県下では珍しい開拓集落が形成された。安曇川に面する北部は河岸段丘の段化が著しく、典型的な発達を示している。

饗庭野台地は饗庭野丘陵の北部から西部にかけて広がり、堂建山の南東麓から東方へ広がる扇状地状の部分と、台地の南西辺から北東へ向かって緩傾斜する部分とからなる。東西の最大長約4km、南北の最大幅約3kmを測り、陸上自衛隊の饗庭野演習場になっている。

これらの他、湖西地方には、饗庭野丘陵の西端部を刻む奥山川の谷口に形成された扇状地が段丘化した奥山段丘(Ⅲd₂)、饗庭野丘陵の東端に付着する下位段丘である饗庭段丘(Ⅲd₄)、石田川の下流に形成された扇状地が石田川の回春によって段丘化した石田川河岸段丘(Ⅲd₅)などがある。

Ⅳ 低地

Ⅳa 湖北低地

湖北地方の低地は、姉川をはじめとする諸河川の沖積作用によって琵琶湖の北東岸に形成された湖北平野(Ⅳa₄)を中心に、琵琶湖北岸の大浦湾、塩津湾の湾奥に形成された大浦川河谷低地(Ⅳa₁)と大川河谷低地(Ⅳa₂)、柳ヶ瀬断層に沿う断層線谷の余呉川河谷低地(Ⅳa₃)、および関ヶ原低地帯の一部に相当する山東盆地(Ⅳa₅)に大別される。

湖東平野は標高100mの等高線付近を境に扇状地性低地と三角州性低地とに区分されるが、その境界は漸移的で必ずしも明瞭ではなく、両者ともに古くから水田化されていて条里制の遺構が最近の大規模圃場整備までよく残されていた。姉川・高時川下流の現・旧流路沿いには自然堤防が発達し、主として桑畑に利用されている。湖岸には砂州が連なり、かつては早崎・大郷・入江の内湖を抱えていたが、いずれも現在では干拓されてしまっている。

大浦川河谷低地は野坂山地の東山山塊と日計山山塊との間の断層谷を南流する大浦川の河谷に形成された河谷低地で、標高100m以下の南部は低平な三角州になっている。東辺には大浦川の支流である八田部川によって埋積された小盆地がある。

大川河谷低地は日計山山塊と行市山山塊との間の断層谷を南流する大川によって形成された河谷低地で、標高95m以下の下流部は三角州で、小さな自然堤防も形成されているが、東西両側の山麓には小規模な急傾斜扇状地が続いている。

余呉川河谷低地は伊吹山地と野坂山地との間を直線的に伸び、伊吹山地側には小規模な複合扇状地が連なっているが、野坂山地側の谷間には埋積の遅れた低湿地が見られ、まだ陸化していない部分が余呉湖として残されている。

山東盆地は関ヶ原低地帯に散在する島状の山地の間に介在する低地群の総称で、北東部の伊吹山麓には弥高川によって比較的急傾斜の扇状地が形成され、北西部には姉川中流の河谷低地が見られる一方、南部の天野川沿岸には排水の悪い低湿地が分布している。

IV b 湖東低地

湖東低地は、鈴鹿山脈に源を発して北西流し、琵琶湖に注ぐ芹川・犬上川・宇曾川・愛知川・日野川等の諸河川によって形成された沖積低地で、各河川の谷口には扇状地が発達し、湖岸には三角州性低地が広がって、近江盆地最大の平野になっている。

扇状地は愛知川流域以北でも日野川流域でも標高100m等高線付近まで広がり、その傾斜はきわめて緩く、三角州性低地とは漸移している。愛知川河谷や犬上川・宇曾川扇状地の扇頂部付近の全面的開発は中世以降まで持ち越されたが、その他の部分には条里制土地区画が残存して開発の古いことを物語っている。

日野川河谷を流れる諸河川は、水源の古琵琶湖層群丘陵地からの土砂の流出が激しいため天井川を形成している。

三角州性低地は標高100m以下に広がり、愛知川の現・旧流路沿いには自然堤防の発達が著しいが、日野川沿いには大きなものは見られない。湖岸線に沿っては砂州が細長く続いている。

湖東平野には島状の山地が散在し、それらの

陰には埋め残し性の低湿地が見られ、湖岸には大中之湖をはじめとする多くの内湖が形成されていた。しかしこれらの内湖は第二次世界大戦末期以降相次いで干拓され、現在では曾根沼の一部と西之湖、それに大中之湖干拓地の承水路として残されている大中之湖北東縁を残すのみとなっている。

IV c 湖南低地

湖南地方の低地は、湖南平野(IV c₁)と野洲川河谷低地(IV c₂)、および2つの小盆地(IV c₃)からなる。

湖南平野は琵琶湖南湖の沿岸に形成された沖積低地を主体とし、そのうちもっとも広い面積を占めるのは野洲川の扇状地と三角州である。野洲川扇状地は石部頭首工付近を扇頂とし、標高95m等高線付近を扇端とする半径約5kmの低平な扇状地で、扇面の平均勾配は3.8%に過ぎず、近江盆地ではもっとも平坦な扇状地の一つである。野洲川三角州は野洲川の旺盛な土砂堆積によって形成されたもので、野洲川の南流と北流が河口から約1km付近まで顕著な天井川を発達させ、その河口付近が琵琶湖に突出した典型的な尖角三角州になっていることが、野洲川の堆積力の大きさを如実に物語っている。ことに南流の三角州先端は対岸堅田との間に幅わずか1.7kmに過ぎない狭隘部を作って、琵琶湖を南湖と北湖に分けている。

天井川化した野洲川下流から洪水の危険を除去し、上流域の開発に対応してその排水能力を高めるため、昭和46年以来南北両流の間に野洲川の新しい河道が掘削され、昭和54年には通水が開始された。

湖南平野を流れる河川の多くは天井川になっており、東海道本線および国道1号線が河床の下をトンネルでくぐっている草津川の天井川はよく知られている。

南湖の南岸と東岸では、昭和33年以降、大津市中の浜、打出浜、におの浜、瀬田浦、草津市矢橋沖(帰帆島)、守山市木ノ浜などで大規模な埋立地が造成され、その総面積は293haにも達している。

野洲川河谷低地は水口丘陵と信楽山地との間に細長く伸びる野洲川中流に位置し、水口狭隘部以東の東部では河岸段丘が卓越しているのに

対し、水口狭隘部から横田橋狭隘部までの中部は南北の幅がもっとも大きく、北部には低位段丘、南部には谷底平野が広がっている。横田橋狭隘部以西の西部は明瞭な段丘を欠如し、大部分が谷底平野である。

小盆地に相当するのは、信楽川と大石川との下流部、瀬田川との合流点付近に形成された大石盆地(IV c₃₋₁)と、信楽山地東部の信楽盆地(IV c₃₋₂)である。信楽盆地は北北東～南南西に伸びる地溝性の小盆地で、大戸川によって排水されている。盆地内の地形は複雑であるが、島ヶ原累層および伊賀・油日累層に相当する古琵琶湖層群で構成される丘陵地が多く、その粘土層が信楽焼の原料になってきた。

IV d 湖西低地

湖西地方の低地は、安曇川・鴨川・石田川などの河川によって形成された湖西平野(IV d₂)と、比良山地東麓の複合扇状地(IV d₁)、および花折断層に沿って北流する安曇川河谷の朽木・葛川谷(IV d₃)とである。

湖西平野は饗庭野台地が突出する今津町南端を境に北部と南部に分けられ、北部は石庭川・百瀬川・境川などの河川によって形成された複合扇状地と、その前面の三角州性低地からなり、石田川の谷口には段丘化した旧扇状地が見られる一方、湖岸には松林が断続する砂州が続いて

いる。これに対し南部は、安曇川によって形成された典型的なデルタファンで、網状河流と自然堤防帯、三角州帯が系統的に配列し、湖岸には砂州が発達している。この平野の南端には比良山地北部の花崗岩地域から流出する鴨川が扇状地と三角州を形成しており、鴨川の下流部は天井川になっている。

比良山地東麓複合扇状地は、構造的急斜面を流下する鶴川・滝川・大堂川・家棟川・比良川・四ツ子谷・大谷川・大川・木戸川・野離子川・八屋戸川などによって形成された急傾斜扇状地で、近江舞子など一部の地区を除いて、扇状地が直接湖岸にまで達している。

朽木・葛川谷は比良山地と朽木山地を分ける花折断層に沿って形成された断層線谷で、谷底部には狭少ではあるが連続性のよい河岸段丘と谷底平野が発達している。

IV e 山科盆地

北辺を比叡山地の南端、東辺を醍醐山地、西辺を東山山地に囲まれた山科盆地は、その大部分が京都府域に属しているが、北東端のごく一部、藤尾川と追分川の谷口に相当する所だけが滋賀県域に含まれている。この部分では、近年の宅地開発や湖西線・西大津バイパスの建設、国道1号線の拡幅などによって、地形の改変が著しい。

国土調査法に基づく滋賀県の土地分類基本調査実施年と調査成果刊行年一覧

5万分の1地形図図幅名	実施年	刊行年	5万分の1地形図図幅名	実施年	刊行年
長浜	年	1968年	彦根東部	1985年	1987年
彦根西部	1980年	1982年	竹生島	1986年	1988年
近江八幡	1981年	1983年	西津・熊川	1987年	1989年
京都東北部・京都東南部	1982年	1984年	御在所山	1988年	1990年
北小松	1983年	1985年	亀山	1989年	1991年
水口・上野	1984年	1986年	今庄・冠山・敦賀・横山	1990年	1992年

参 考 文 献

- 水山高幸・池田碩・大橋健(1975)：近江盆地琵琶湖周辺の地形、建設省近畿地方建設局。
- 池田 碩・大橋 健・植村善博・吉越昭久(1979)：近江盆地の地形、『滋賀の自然』所収、財団法人滋賀県自然保護財団。
- 池田 碩・大橋 健・植村善博(1991)：滋賀県・近江盆地の地形、『滋賀県自然誌』所収、財団法人滋賀県自然保護財団。
- 国土庁土地局(1975)：縮尺20万分の1土地分類図(滋賀県)。
- 辻村太郎(1929)：日本地形誌、古今書院。
- 辻村太郎(1943)：断層地形図説、古今書院。
- 中沢圭二(1961)：比叡山の生いたち、『比叡山—その自然と人文—』所収、京都新聞社。
- 池田 碩(1964)：花崗岩地域の地形学的研究—信楽山地北縁堂山付近を事例として、立命館文学233。
- 藤本秀弘(1966)：瀬田川・信楽川のポットホール、地学研究17の2。
- 水山高幸他(1967)：阪神とその周辺の地形、地理学評論40の11。
- 池田 碩(1967)：花崗岩山地の解体過程について—信楽山地北縁田ノ上山地を事例として—、京都府私学論集5号。
- 池田 碩(1967)：比良山地の地形学的研究序説、東山学園研究紀要12・13。
- 松田 博・奥西一夫(1970)：田上山地の禿山の地形学的特性、京大防災研究年報13-A。
- 金子史朗(1972)：地形図説1・2、古今書院。
- 東郷正美(1974)：琵琶湖北岸、野坂山地の変動地形、地理学評論47の11。
- 大橋 健(1967)：近江盆地における第四紀地形編年の研究—饗庭野北西部の地形と山砂利層—、東山学園研究報告12・13。
- 東郷正美(1968)：安曇川中下流域の地形発達史、法政大学地理学集報。
- 東郷正美(1971)：饗庭野台地の変形について、地理学評論44の3。
- 大橋 健(1971)：比良山地北縁部の段丘と崩積層、地理学評論44の2。
- 奥村由彦他(1972)：滋賀丘陵の変形に関する2・3の考察、法政大学地理学集報。
- 林 隆夫(1974)：堅田丘陵の古琵琶湖層群、地質学雑誌80の6。
- 大橋 健(1978)：琵琶湖南岸地域の地形発達史、立命館文学394・395。
- 植村善博(1979)：湖東丘陵の古地理と地形発達史、立命館文学410・411。
- 池田 碩・植村善博(1983)：八日市市周辺の地形と地質、『八日市市史第一巻』所収、八日市市役所。
- 井関弘太郎(1972)：三角州、朝倉書店。
- 滋賀県・草津市(1974)：草津市吉田の条里景観遺存地区の歴史地理学的調査報告。
- 籠瀬良明(1976)：自然堤防、古今書院。
- 小林健太郎・高橋誠一(1977)：愛知川扇状地北半部の地形と農業水利、滋賀大学教育学部紀要—人文・社会科学—27号。
- 小林健太郎他(1979)：滋賀県草津市の天井川、滋賀大学教育学部紀要—人文・社会・教育科学—29号。